

「フランス文学」はいかに創られたか

小倉 孝誠 著

近代国家と国民文学の形成辿る

本書の著者はこれまで『歴史と表象——近代フランスの歴史小説を読む』（新曜社）、『歴史をどう語るか——近現代フランス、文学と歴史学の対話』（法政大学出版局）などの著書で、フランス文学を歴史と結びつけて論じてきた。本書も、フランスにお



いて自国の文学が「フランス文学」として明確に認識され、文学史が成立していく歴史的過程を辿る試みとなっている。

本書の構成は、日本におけるフランス文学の受容に言及した後、大きく二つに区分される。

前半部では19世紀初頭における、フランス革命後の

近代国家の成立と連動して「国民文学」の概念が定式化されていく過程を、主にスタール夫人の著作を通して明らかにしている。

著者によればスタール夫人は、従来のように古代ギリシア・ローマ文学を正典（カノン）とみなすのではなく、文学を「社会の表現」と考え、習俗や政体、宗教など社会制度とのつながりにおいて捉えようとした。そこから生み出されたのが、国民精神を表象する「国民文学」の概念であった。

本書の後半部では、1870年の普仏戦争の敗北後、第三共和政の下、未来の市民を育成するために、中等・高等教育に国民文学が組み込まれ、文学史が制度化されていく過程を探っている。とりわけランソンの『フランス文学史』を取り上げ、ランソンが修辞

村田 京子 評

大阪府立大学 名誉教授

学や批評、歴史学との差異化を図りながら、「文学史の原理を国民性や国民統合の名において」語った政治的理由を明らかにしている。

著者はさらに、ランソン以降の文学史および、日本におけるフランス文学史に触れるだけではなく、文学史の未来への展望も語っている。

一つは「フランス語圏文学」も含めることであり、もう一つはこれまで蔑ろにされてきた女性作家の掘り起こしで、それは日本文学も含めた文学史全体に対する問題提起となっている。

以上のように、様々な作家や思想家、歴史家の文献を参照し、従来とは異なる視点からフランス文学を論じた本書は、読者に新たな知見をもたらすものと期待できよう。

（白水社 2750円）



おぐら こうせい 慶応義塾大学教授。